

産業内貿易の変化の経路分析

熊本学園大学経済学部 金 栄緑*

1. 報告の目的

近年、産業内貿易 (Intra-Industry Trade、以下 IIT) の変化に関する研究が活発に行われている。IIT の変化に関する研究の主なテーマは、大きく2つがあげられる。第1は、IIT の計測に一般的に使われている G-L 指数がもつ限界性に関する問題である。G-L 指数は、一定期間で全体の貿易に占める IIT のシェアを表すものであり、一国の IIT の程度を示す最も優れたものである。しかし、貿易のフローの側面から IIT の変化を説明するには限界がある。したがって、IIT の変化に関する動学的分析を行うときには、修正した G-L 指数あるいは、新しい計測方法が必要とする。第2には、IIT がもつ政策的インプリケーションである。すなわち、貿易の拡大には、IIT が大きな役割をしていることと、貿易の拡大による要素市場における調整コストの発生に関する問題である。先行研究は、貿易拡大の調整コストは産業間貿易より産業内貿易の方が低いという結論をだしている。本報告のねらいは、IIT の変化を分析するための新しいフレームワークの提案にある。

2. 先行研究

IIT の動学的分析に関するパイオニア的研究には、Hamilton & Knist (1991)があげられる。彼らは、限界的産業内貿易 (Marginal IIT) の指数 (H-K 指数) を提案した。その後 Greenaway, Hine, Milner, and Elliott (1994)によって代替的な計測方法が提案された (G-H-M-E 指数)。その他主要な研究としては、Brühlhart (1994)などがあげられる。以後多くの研究から代替的な計測方法が報告されているが、主流は、H-K か G-H-M-E の修正補完の形を取っている。

IIT の変化に関する研究の新しいアプローチには、Shelburne (1994)による G-L 指数の幾何学的方法を用いた分析がある。同じく、Azhar, Elliot and Milner (1998)によって Industry Trade Box が提案された。

Hufbauer & Chilas (1974)は、貿易の拡大と IIT に関して、“戦後、貿易の拡大が行われたが、そのほとんどは IIT の拡大の形を取っていた”と主張した。これは、貿易拡大が生産要素市場における調整コストと密接に関連していることを示唆している。

貿易の拡大 (IIT の拡大) と調整コストとの問題については、Smooth Adjustment Hypothesis (以下 SAH) と呼ばれる仮説によって説明されている。輸出部門と輸入部門での要素投入比率は、産業間より産業内でより同質性を持つ。したがって、産業間貿易より IIT の方が、拡張の調整がスムーズに行われる。SAH に関して最初に言及したのは Balassa (1966)であり、以後 Krugman (1981)、Brühlhart (1994)などのによって理論的体系性が確立された。

3．分析方法（モデル）

産業内貿易は、基本的に G-L 指数を用いて計測する。IIT の変化（総貿易のフロー）の計測には、Brühlhart (1994)の方法を用いて分析する。

IIT の変化を大きく 3 つ（A、B、C）の経路に区分して、その特徴を分析する。経路 A は IIT が増加しながら貿易規模（Total Trade）が拡大するタイプであり、経路 B は一方的な貿易（輸出あるいは輸入）の増加によって貿易規模が拡大するタイプである。経路 C は貿易規模が縮小して IIT が増加するようなタイプである（厳密には GL 指数の増加）。

本研究は、IIT の変化分析の際、G-L 指数などを使った分析から起こり得る問題、すなわち貿易規模の縮小から生じる G-L 指数の増加や、貿易のパターンの変化によって生じる G-L 指数の増加などを IIT の増加から切り離して扱うことで先行研究との差別性を持つ。

Shelburne と Azhar, Elliot and Milner タイプの幾何学的（Trade Box）手法を用いて、SAH と貿易の拡大を表す経路を導出する。Trade Box は、IIT を含んだすべての貿易の構成要素の変化を表すことができる有用な分析ツールである。

4．主要結論

理論モデルから、パターン別の経路を究明した後、日本・アメリカ・韓国・中国の貿易統計から実際のパターンを検証する。

IIT の理論研究から究明された貿易のモデルと、実際の貿易統計が示しているような定型化された事実（stylized fact）との整合性を説明する。

貿易の拡大の望ましい（低いコスト）経路は A タイプである。

研究を補完拡大しては、自国の利益を最優先しながら自由貿易を要求している世界経済において IIT による 1 つの政策的提案をすることができると考えられる。

5．主要参考文献

Azhar, A. K., R. J. R. Elliot and C. Milner (1998), “Static and Dynamic Measurement of Intra-Industry Trade and Adjustment: A Geometric Reappraisal,” *Weltwirtschaftliches Archiv*, 134, pp. 404-422.

Brühlhart, M. (1994), “Marginal IIT-Measurement and Relevance for the Pattern of Industrial Adjustment,” *Weltwirtschaftliches Archiv*, 130, pp. 600-613.

Greenaway, D., R. C. Hine, C. Milner and R. Elliott (1994), “Adjustment and Measurement of Marginal Intra-Industry Trade,” *Weltwirtschaftliches Archiv*, 130, pp. 418-427.

Hamilton, C. and P. Kniest (1991), “Trade Liberalization, Structure Adjustment and Intra-Industry Trade: A Note,” *Weltwirtschaftliches Archiv*, 127, pp. 356-367.

Lloyd, P. and H. Lee (eds.) (2002), *Frontiers of Research in Intra-Industry Trade*, Macmillan, UK.

Shelburne, R. C. (1987), “Change Trade Patterns and the Intra-Industry Trade Index: A Note,” *Weltwirtschaftliches Archiv*, 129, pp. 829-833.

* Kim, Youngrok、熊本学園大学 経済学部、e-mail:kim@kumagaku.ac.jp